

写真：在本彌生



画家・絵本作家
ミロコマチコ

父の読み聞かせで開かれた 絵本の世界へのとびら

絵本との出会いは、寝る前の父の読み聞かせでした。2つ下の弟と2人、幼稚園から小学校低学年くらいまで毎晩読んでもらっていたんです。お気に入りは今江祥智さんが関西弁に翻訳した『ぼちぼちいこか』というアメリカの絵本。父がほかの絵本も大阪弁にアレンジして読むので、弟とゲラゲラ笑ったのを覚えています。

実は絵本作家より先に人形劇を作ることを志し、大学時代は友人と4、5人で、保育園などで上演していました。でも卒業のタイミングで解散してしまっ。私はお話を作るのが好きで、劇団でも書いていたので、「そうだ、絵本を作りたい！」

と思い立ちました。当初は絵を描きたいというより、表現するのにやむを得ず絵が付いてきたという感じでした。でも描き始めるとすごく楽しくなって。2年くらい絵本教室に通い、展示をするようになって、2012年に初めての絵本を出しました。

藤枝リュウジさんのお誘いで2015年から『味の手帖』の表紙絵を描くようになったのですが、いきものの絵ばかり描いていた私に「たべもの」の絵の依頼が来たのにはとても驚きました。作品を自由に描くのと「たべもの」というお題があって描くのととはまったく違うのですが、やってみたらおもしろかった。2019年に奄美大島へ移住して



森で感じたことを絵にする。光が刻々と変わり、風の音になる。鳥や虫がガサゴソうごめく。森はとても騒がしく、描きたい気持ちがあふれてくる。
写真：在本彌生

アトリエの窓からは、遠くに森が見える。風の動きを捉えて揺れる木々を眺め、今日はどんないきものが浮かぶのか、心と対話している（奥に見えるのが森で生まれた作品）。
写真：在本彌生



からは島のたべものを描くことが増えました。トビンニャという貝とか、ドラゴンフルーツとか。この前はたんかんを描いて、お隣のたんかん農家に『味の手帖』をあげたら喜んでくれました。

奄美では通学路のそばに暮らしているので、小学生が学校帰りに顔を出します。奄美の子はぜんぜん物おじせず、すごく素直でかわいくて。夏休みなどは毎日遊びに来て絵を描いたり、うちにある絵本などを読んだりしています。学校では子どもたちと一緒に絵の具まみれになるワークショップもやりました。子どもたちは、外でも目いっぱい遊びます。夜はゲームもやるようですが、

明るいうちは自然の中で遊ぶおもしろさの方がゲームに勝るのでしょうか。エビを捕ったりツリーハウスを作ったり、飽きることがない。

奄美では人より自然が主役なんです。私も奄美に来てからは、泥染めやテーチギ染めをした布に絵を描くようになりました。島で育った植物たちから色をもらって島で感じたものを描くと、表現にたくさんの力をくれます。ここ数年描いている妖精のようないきものも、奄美と出会って生まれました。奄美への好奇心は尽きないので、島での暮らしや人との関わりを楽しみながら、これからもどんどん描いていきたいと思っています。

message from mirocomachiko

繰り返し読んだ絵本たちがたくさんの“好き”をくれました。
呪文のような言葉と音、牛のおしりの形、ゆきだるまが持っている花の色。
それらは永遠に心にひっついて、私を通して、表現されています。

書籍紹介



ドクルジン
ミロコマチコ
亜紀書房 1,980円(税込)



画集 ごはんめくり
ミロコマチコ
味の手帖



冊数限定
予約受付中
※詳細はQRコードから

ミロコマチコ

1981年大阪生まれ。2004年から画家として活動。デビュー作『オオカミがとぶ』(イースト・プレス)で第18回日本絵本賞大賞受賞。ブラチスラバ世界絵本原画ビエンナーレ(BIB)に入賞のほか、著書・受賞歴多数。2019年より奄美大島在住。6月11日までかごしま県民交流センターにて展覧会を開催中。